

現代沖縄と親鸞思想

——彫刻家・金城実をめぐって——

福島 栄寿

一

アライ・ヒロユキは『天皇アート論』（社会評論社、二〇一四年）で、彫刻家・金城実を「政治と美術を接合するアクティヴィスト」と評している。本発表の視座と課題は、このアライの言葉を借りれば、政治と美術を接合しつつ、親鸞思想を梃子としながら、沖縄を磁場としてなされてきた金城実の表現活動に着目し、現代沖縄における親鸞思想の展開を考察することにある。そして予め言えば、金城の制作活動に通底しているモチーフは、沖縄戦の歴史を踏まえた反戦・平和と、在日韓国・朝鮮人や被差別部落の人々との親交から生まれた反差別へのメッセージの発信である。

金城の制作活動に通底する基本的な考え方は、集団強制死が起こったチビチリガマ入口に建てた「世代を結ぶ平和の像」（一九八七年）の構想や制作過程を通じて形作られていったように思う。ある日、週刊誌の特集記事で久米島・渡嘉敷島の集団強制死について知った金城は、「肝苦しさ」^{チムクリ}「沖縄人としての屈辱を感じ」たという。沖縄人の肝苦しさを同胞としてかみしめつつ、しかしその上で、如何にして沖縄人が「誇り」を再び持ち得るのか。金城自身が、自らに問いかけながらの制作活動であったという。

二

沖縄人はどうあるべきなのか。「私はいまでも父親が国への忠誠を誓って兵隊に志願し、国家にのせられていったことがぐちゃぐちゃしてなりません。……死者に揺さぶりをかける恨が、怨念が沖縄人にはいま必要ではないでしょうか」と、金城は、韓国の「恨」の文化をこそ、沖縄人は見倣うべきであるという。むしろ、その「恨」とは、「優しさに対立するものではなく、恨の精

神を發揮することが優しいのであり、優しさは恨に裏付けられている」のだという。金城の彫刻作品制作とは、いわば「恨」に裏打ちされた優しさの表現なのである。

金城は、元読谷村長の山内徳信や魯迅、ケーテ・コルヴィッツに学びながら、「芸術は、民衆の解放の武器たりうるか?」という言葉を紡ぎ出していく。芸術、表現とは、思想というフィルターを通して、昇華し普遍化されねばならないとする金城は、集団強制死の現場にいた民衆たちや殺された人々にも抵抗や抗議の意志が存在したことを表現し、彼等の人間的尊厳を失わせない作品こそを創らねばならないのだと述べる(金城実『沖繩を彫る』現代書館、一九八七年)。金城にとって重要なのは芸術が運動という力を持つことであり、そのためには、技術の特権化し、作らず側、作る側、見せられる民衆の関係を分断してはならないとも(同前)。

三

金城の思想を知る上で重要なのが、親鸞と「浄土」である。「世代を結ぶ平和の像」の制作に先立ち、金城は真宗大谷派において同朋会運動を担ってきた教学者の玉光順正や藤元正樹を介して、親鸞と「浄土」について知る機会を得ていた。天皇制の世界よりも深い、それを包み込むくらいの宇宙観。金城は、そういう世界観として、「浄土」の世界と初めて出遇ったのだった。

「浄土」と出遇った金城は、玉光の言葉で言えば、「浄土を根拠として穢土を生きる」という、いわば「在日浄土人」の生き方をいかに表現していくか、を自らの課題としていくことになる。金城宅裏庭のアトリエには、「恨の碑」とともに「恨を解いて浄土を生きる」という言葉がある。「恨を解く」とは、金城によれば「挫折した夢をかなえる営み」であり、怨みを晴らすだけの話ではなく、望みをかなえるということであり、新しいその世界での生を実現することを意味す

る。

また、同じくアトリエには、木彫の「親鸞像」が実際目立っている。「恨を解いて浄土を生きる」という金城自身の、いわば「念仏」に込められた願いを思うとき、この「親鸞像」に刻まれた念仏弾圧を告発する親鸞の「主上臣下法に背き義に違し忿を成し怨を結ぶ」という文が、単なる権力批判の意味ではないことを知るのである。時の権力者によって虐げられた被害者である親鸞は、挫折した夢の実現に向けて恨が解かれた新たな地平、浄土の世界を求めようとした、その親鸞の生き様に学ぶべきではないか。それが金城の思いであろう。

入口に「琉球親鸞塾」の看板が掛かった金城のアトリエ内には、真宗大谷派から授与された「琉球親鸞塾」の提灯と暖簾がかかっている。金城の歩みのなかで、幾つもの出遇いが重なり、かつて玉光が開き閉鎖した「琉球親鸞塾」は、二〇〇七年、再び読谷村に開かれることになった。それは、単なる偶然の出来事で

はないだろう。金城が大谷派僧侶らとの出遇いや活動と共にすることを介して、親鸞の思想の種が沖繩に蒔かれ、芽を出していく過程であった。それはまた、同朋会運動の沖繩への展開として、生きた信仰運動の相と見ることができるとはならないだろうか。

四

以上やや足早な要約となったが、金城の葛藤を抱えた半生のなかで彫刻制作という芸術表現へと込めた思いが芸術思想へと意識的に昇華させられていく過程が見えてきたのではないだろうか。そして、その過程のなかで、玉光順正をはじめとする真宗大谷派僧侶たちとの出遇いを通して、金城の思想的転回の梃子となる親鸞や「浄土」の思想との出遇いがあったことも見えてきたのではないだろうか。そして、金城には、沖繩人としての、ヤマトで虐げられ傷ついた体験を持つ者としての生き様が根底にある。沖繩人は、その差別し、虐げるまなざしに対して、脆弱であってはならない。「毒気のある笑い」をもって対抗していくという強か

さを持たねばならない。そう金城が呼びかける声が、アトリエから聞こえてくるようだ。

金城の関心は、人びととの水平な出遇いを契機として、在日朝鮮・韓国人や、障害者へと向けられていく。加えて、沖繩戦の過ちを二度と繰り返してはならないという彼の思いは強烈である。皇民化教育で帝国軍人として死んだ父を、靖国裁判の法廷では、「犬死にしたのも同然だ」と訴え、母親を悲しませた金城であった。そんな金城が衝撃をもって出遇うことになる「浄土」思想は、天皇制国家であるヤマトを相対化する根拠として金城に直感されたのであった。浄土とは国を相対化する根拠であり、念仏は運動として表現されるという玉光の主張に共鳴するように、金城は、沖繩戦で集団強制死をはじめ、不条理な死を押し付けられた沖繩人の亡き命を思い、靖国裁判を通してこの国のあり方を問うたのであった。

大阪時代の金城が出遇った玉光は、同朋会運動の核心を担う教学研究所所員の藤元正樹が説く教学に出遇

い、教団の同朋会運動に触れ、その歴史に参加し、活動していた大谷派僧侶であった。そして、玉光と出遇った金城によって、沖繩に真宗の種が蒔かれていくことになったのである。以上のような一連の流れは、真宗同朋会運動の沖繩への展開過程の相として見る事が出来るのではないか。そして、ここには、大学アカデミズムの教学とは異なった「行学」(善導)としてのもう一つの教学的実践の展開を指摘することもできるだろう。

五

金城のアトリエにある「琉球親鸞塾」のメンバーは、必ずしも多くはない。しかし、知花昌一、愈漢子ユハンジといったメンバーはいずれも活動的であり、発信力を持っている。筆者も参列した知花が住職を務める「何我ナニガ寺」の道場開きの日(二〇一四年二月十六日)、金城はマイクを持って、本尊が安置された本堂兼談話室に一杯に詰めかけた村の人々に、自らが靖国裁判を闘ってきた理由、住職の知花昌一が日の丸を焼いた理由、玉

光や親鸞とその「浄土」の思想に出遇ったこと、そして知花とともに真宗大谷派の門徒となつてアトリエに親鸞塾を開いた理由を、風邪で体調を崩しながらも熱弁した。そして金城は、今後いざれ時期をみて、この何我寺に、「琉球親鸞塾」を統合した方がよいと述べた。

読谷村に開かれた聞法道場「何我寺」は、いかに展開していくのか。金城の彫刻制作をはじめとする様々な活動は、これから、いかに取り組まれていくか。その動向からは、これからも目が離せない。

なお、本発表のフルペーパーは、同タイトルで、近く刊行予定の大谷大学真宗総合研究所編『真宗総合研究所研究紀要』第三二号に掲載される予定である。

(本学准教授 近代日本仏教史・近代日本思想史)

〈キーワード〉「恨を解いて浄土を生きる」

真宗同朋会運動、琉球親鸞塾

〔編集委員会付記〕

この他の発表者及び発表題目は次のとおりである。
地域祭礼と祭礼文化圏

本学准教授 野中 亮

人間存在の基礎構造としての教育

本学教授 川村覚昭

以上の発表内容は次号以降の『大谷学報』に論文として掲載予定である。